日本経済新聞　2021年4月3日掲載

トランコム、無人台車やロボ

自動倉庫、人手4割減

物流大手のトランコムは新たに倉庫内の作業を自動化するシステムを開発した。無人の台車やロボットを使い、5月までに埼玉県内の物流センターで導入する。既にある倉庫に低コストで構築できるのが特徴で、人手不足の緩和や庫内の安全性向上も期待できる。効果を検証しながら他の物流センターにも展開する。

台車が倉庫内を自動運転する（トランコムの倉庫）

投資コスト、3分の1に

まず埼玉拠点で導入

日用品メーカーの商品を取り扱う騎西ロジスティクスセンター（埼玉県加須市）で取り入れる。トランコムは企業から物流業務を一括して請け負う「サード・パーティー・ロジスティクス（3PL）事業」を手掛けている。

倉庫の自動化はアマゾンジャパン（東京・目黒）やアスクルといったネット通販企業で進んでいる。一方、多くの3PLでは依然として人手に頼りがちなのが現状だ。3PLは一般的に1年程度の短期間で顧客と何度も契約を更新する場合が多い。自動化投資には先行費用を補うまでに一定期間を要するため、踏み切りづらい側面があった。

トランコムは20年に提携した物流スタートアップのChinoh. Ai（チノーエーアイ、東京・千代田）と組み、3億円強の投資でできるシステムを開発した。トランコムの担当者によると「従来の3分の1のコストで構築できる」という。ノー社が最新の中国機器を仕入れ、トランコムが運用ノウハウを作る分担で、既に特許も取得した。

新システムでは倉庫内作業の中間過程を自動化できる。倉庫への保管や取り出しを自動運転の台車やロボットが担う。トラックから入荷商品を荷下ろしたり、出荷商品を積み込んだりする作業は従来通り人手を介す。

同システムを導入すると、騎西拠点では作業工程に必要な人数がこれまでの27人から16人に減らせる見通しだ。4割の省人化が見込める。担当者は「6年ほどで投資分の回収ができる」と話す。

ロボットが運ぶため天井空間も利用しやすく、正確な在庫管理もしやすい。フォークリフトを使った作業が少なくなり、事故の危険性を減らせる利点もある。

トランコムは新型コロナウイルス禍でも3期連続で最高益を更新する見通しだ。2021年3月期の純利益は20年3月期比で7%増の52億円を見込む。

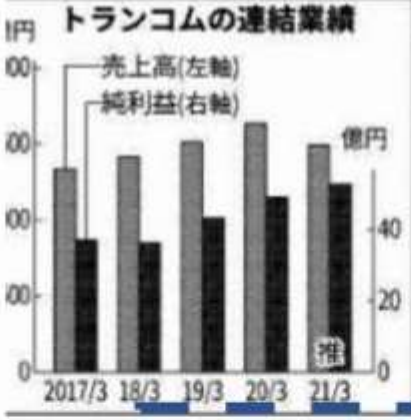
3PL事業が好調で、巣ごもり需要を取り込む日用品メーカーとの取引比率が高い点が追い風となる。同事業は倉庫作業の習熟度の向上も採算改善につながる。コロナ禍で荷動きが滞っているため、荷主と中小運送会社の輸送需要を仲介する求貨求車事業が減収となる影響を補う。

トランコムは同じ顧客に3PLと求貨求車をセットで提案できる点を強みに、事業間の相乗効果を出したい考え。今後も3PL事業の自動化を含めたサービスの拡大を通じ、新規顧客の獲得や既存客の深掘りを図っていく。（野口和弘）

トランコムは入出荷の中間作業を自動化

- トラックから荷下ろし
- ↓
- 自動化　倉庫に収納・保管
- ↓
- 自動化　倉庫から取り出し・仕分け
- ↓
- トラックに積み込み

トランコムの連結業績



掲載日 2021年04月03日 日本経済新聞 地方経済面 中部